

筆者は、ファチマ、エル・ロッシーオ、サンチャゴ・デ・コンポステラの巡礼、四国八十八ヶ所遍路を観察した。その結果、まず、巡礼行動の形態が個人なのか、集団なのかで分類が可能となるのではないか。個人巡礼の形態は、サンチャゴ・デ・コンポステラ、一方、エル・ロッシーオ、ファチマ巡礼者のほとんどは集団でやって来る。前者は、エルマンガドと呼ばれる、信徒団体が単位となって、馬、馬車、トラクター、徒歩で聖地までやって来る。それに対して、後者の巡礼者たちは、エルマンガドのような組織化された集団ではなく、夫婦関係、友人関係を中心とした小集団でやって来る。集団の大きさから言えば、前者の方が圧倒的に大きい。小さなエルマンガドでも数十人、大きなエルマンガドになると数百人。一方、ファチマの集団の大きさは十数人から、多くてせいぜい三十人位である。サンチャゴ・デ・コンポステラ巡礼は、徒歩の巡礼者の場合は、かなりの人々が単独で歩き始めている。もちろん歩いている間に友人関係が形成され、集団で歩くケースも多いが、日によって歩く相手が異なったり、途中で仲たがいで別れたりということもあり、基本的には個人単位であるように思われる。四国八十八ヶ所遍路の巡礼者の大部分は、実態調査によれば集団単位なのだが、これらの大多数は観光旅行を目的としたもので、しかもバスやタクシーといった乗り物を利用した団体遍路や大名遍路が多い。巡礼行動というのは、本来的には、宗教的、精神的な動機に基づく、徒歩による聖地に向かう行動のように思われるので、観光目的で乗り物の手段で遍路する人々を除く必要がある。そうすれば、ほとんどが個人で歩いており、四国八十八ヶ所の本来的な巡礼者は個人単位ということになる。

次に父性的-母性的という軸で分類が可能ないように思われる。サンチャゴ・デ・コンポステラ巡礼は、サンチャゴの遺骸に詣でる道であり、四国八十八ヶ所は弘法大師が開発した霊場を辿る道である。後者の巡礼者は「同行二人（どうぎょうににん）」と書かれた管笠をかぶり歩く。大師と共に歩いているという意味である。また大師堂や大師像がたいていの遍路寺にはある。前者の巡礼でも、いたる所にサンチャゴの心象やイメージを観

ることができる。聖地であるサンチャゴ・デ・コンポステラのカテドラルにはサンチャゴの像があるし、旅の途中にも（エル・セブレイから少し行った所）サンチャゴの像が立っている。またアストロガの巡礼博物館でもサンチャゴの像をみることができる。明らかに信仰の対象はサンチャゴや大師であり、男性性の方向に、これらの巡礼は位置づけられるのではないか。男性原理によって支配された巡礼行動ではないか。

また守護聖人サンチャゴは、スペインではイスラム教徒との戦いのシンボルである（有本、1983）。

「片手に赤い十字架の入った軍旗、もう一方の手には燦然と輝く剣を掲げたスペインの軍神は、「サンティアゴ、突っ込め」の号令に呼応して邪悪な異端者征伐に現れた」（p. 72）

それに対して、ファチマとエル・ロッシーオ巡礼は、聖母マリア信仰に基づくものである。いずれも聖地誕生の経緯は、聖母マリアの出現であるし、ミサの後に、聖母マリア像の行進がセレモニーとして行われている。特に、エル・ロッシーオは土着信仰とキリスト教信仰との融合であるとも指摘されている。つまり、土着信仰は大地、母なるものに基づく信仰であり、また、アンダルシア地方では、イエスキリスト信仰というより、聖母マリア信仰である。有本（1983）も指摘している。

「スペイン語で大地、故郷を意味するティエラ（tierra）は女性形だが、スペイン人は大地に母性的な神聖を感じてきた。

大地から生命が誕生する。大地は豊饒の祈りの対象であり、子どもを生む母性と同一視され、ここに地母信仰が起きる。太古以来の地母信仰とキリスト教の父権的全能の神とは相容れないものであった。アフロディテ、アルテミス、ヴィーナス等の女神の系譜につなげて聖母マリアを持ち出した人はよほど頭のよい人だ。いや聖母マリアを導入せざるを得ないほどその土着信仰は根強いものであったのだろう。ここから熱烈なマリア信仰が始まる。美と愛の象徴マリアはスペインの地にも舞い下りる。」（p. 153）

たとえば、筆者の経験によると、アンダルシア地方のセビリヤのセマナ・サンタのパソの行進中